

第一篇 開戦ノ経緯ト作戦準備

第一章 開戦ノ経緯

第一節 開戦前ニ於ケル日本ト諸外國トノ關係

一 日本ト米國トノ關係（出所「大東亞戰爭調査會ノ公刊書」）
日本ト米國トノ關係ハ日露戰爭及第一次世界戦争ヲ劃期トシテ其ノ
様相ヲ變ヘ米國往時ノ對日同情的態度ハ兩國ノ對立の状態ニ變化ス
ルニ至リ其ノ對立ノ政治的議題ハ日本人移民問題、支那ヲ繞ル兩國
勢力ノ限界ニ關スル問題及海軍軍備制限ニ關スル問題ヲ以テ其ノ主
要ナルモノト爲セリ

然ルニ昭和六年滿洲事變勃發スルニ及ビ米國ノ對日態度ハ一段ト尖
銳且強硬ヲ加ヘ次テ昭和十二年支那事變勃發以後支那ヲ環ル兩國根
本政策ノ背馳ト米國ノ在支諸權益ガ日本ノ軍事行動ニ依リ侵害セラ
ルル現實的事象トニ依リ其ノ對日政策特ニ經濟政策ハ日本ノ經濟發
展ヲ阻止スルノ線ニ沿ヒテ強化セラレ來リ昭和十五年ニ於ケル日獨

伊同盟ノ締結竝ニ昭和十六年ニ於ケル日本ノ南部佛印進駐ヲ見ルニ
及ビ遂ニ其ノ頂點ニ達セリ

今支那事變以後ニ於ケル米國ノ顯著ナル對日態度ニ就テ述ブレバ左
ノ如シ

昭和十二年勃發セル支那事變ハ米國ノ反日輿論ヲ誘引激化セシメ
之ガ反影トシテ米國政府ハ昭和十三年七月一日所謂「モラル、エ
ンバーゴー」(道義的輸出禁止)ヲ實施シテ先ヅ航空機及其ノ部
分品ニ之ヲ適用シ翌十四年十二月ニハ航空關係附屬品、飛行機製
造材料、航空用高級「ガソリン」生産ニ關スル設計、設備等ニ之
ヲ擴張セリ

昭和十四年七月二十六日ニ至リ米國政府ハ突如トシテ通商條約廢
棄ヲ通告シ來リ六ヶ月後即チ翌十五年一月二十六日ヲ以テ日米兩
國ハ無條約狀態ニ入レリ

昭和十五年七月三日米國議會ニ於テ可決シ採擇セラレタル國防資

材輸出取締法ハ米國陸軍指定物資航空機關係品及工作機械ニ輸出許可制ヲ適用セルモノニシテ後其ノ品目ヲ高級「ガソリン」、高級潤滑油及第一級屑鐵ニ擴大シ爾後連續的ニ制限品目ノ追加ヲ見タルト昭和十六年五月二十九日以降ハ比律賓ヨリノ輸出品ニモ適用セラレタルトニ依リ米國ノ對日輸出ハ事實上禁止ニ近キ状態ニ立至レリ特ニ昭和十五年七月二十六日竝ニ同年九月二十六日深ラレタル米國政府ノ措置ニ依ル石油及石油製品竝ニ屑鐵及屑金屬ノ輸出制限品目追加ハ日本ノ國家的機能維持上存亡ノ岐路ニ立ツベキ重大問題化スルニ至レリ

昭和十六年七月十八日日本船ノ「パナマ」運河通過ヲ差止メラル
昭和十六年七月二十六日即チ日佛印共同防衛協定成立直後米國政府ハ日本ニ對シ全面的資産凍結令ヲ適用セリ之ニ依リ在米日本ノ商社銀行ノ資金ハ米國々外ハノ移動ハ勿論米國々内ニ於テモ之ガ使用ヲ禁セラレ日米經濟關係ハ此ニ完全ニ斷絶セリ

支那事變開始以來昭和十五年ニ至ル間米國ノ對支借款ハ四回ヲ以テ
合計一億七千萬弗ニ上リ其ノ他各般ニ亙ル對支援助ハ日本朝野ノ感
情ヲ刺戟シ又之ト反對ニ支那ニ於ケル我方軍ノ作戰行動等ニ依ル米
國權益ニ對スル侵害等ニ關シ米國側ヨリ日本政府ニ對スル申入未解
決案件大小二百餘件ニ上リ米國上下ノ感情的惡化ヲ宣傳セラルル等
兩國ノ友好關係ハ相互的ニ益ク斷絶ノ狀態ニ置カラルニ至レリ

ニ日本ト英國トノ關係ハ出所ト大東亞戰爭調査會ノ公刊書

第一次世界戰爭終了後日英同盟ヲ廢棄シタル後ニ於ケル英國ノ對日政
策ハ大體ニ於テ米國ト步調ヲ同ウシ滿洲事變、支那事變間ニ於ケル對
日反對的態度及海軍々備縮少會議ニ於ケル對日抑壓的態度ハ其ノ主要
ナル問題ナリ

支那事變遂行間ニ於ケル英國ノ對支援助ハ日本ノ最モ好マザル所ニシ
テ帝國ハ極力之ガ中止ヲ主張シ來リシガ昭和十四年七月二十一日天津
租界問題ニ關スル東京會談ニ於テ英國ハ「大講歩」ヲ爲シ現ニ支那ニ於

テ進行中ナル支那事變ノ現實ノ事態ヲ承認シテ日本軍ノ必要トスル
目的達成ニ對シ妨害トナル行爲又ハ措置ヲ是認セザル旨ヲ約シテ
蔣政策ヲ放棄セントセシガ其ノ直後即チ七月二十六日米國ガ日本ニ
對シ通商條約ノ廢棄ヲ通告セル事實ニ依リ影響セラレタルモノノ如
ク東京會談ハ他ノ問題ニ依リ遂ニ決裂ヲ見タリ

昭和十四年九月英獨開戦スルニ至ルヤ日本ハ當時迄ノ情勢上反英親
獨的政策ヲ執リタルヲ以テ英國ノ帝國ニ對スル警戒逐日濃厚トナリ
次デ昭和十五年九月日獨伊三國同盟ノ締結ヲ見タル以後其ノ對日態
度ハ船舶航行問題其ノ他ヲ繞リ遂次准敵國視ニ近キ觀ヲ呈スルニ至
リ歐洲諸國トノ海運ニ依ル交通ハ不可能トナレリ
然レドモ尙兩國ノ條約關係ハ依然保持シアリシガ東亞ノ情勢漸ク急迫
ヲ告ケ米國ガ對日全面的資産凍結合ヲ發動セルト同日即チ昭和十六
年七月二十六日ニ至リ「クレイギー」駐日大使ヲ通ジテ日英通商航
海條約日印通商條約、日緬通商條約ノ三條約ノ廢棄ヲ正式ニ通告シ

來リ我が資産ハ凍結セラレ日英ノ關係亦此ノ時ヲ以テ無條約狀態ニ突入セリ

日本ト蘭印トノ關係（出所「大東亞戰爭調査會ノ公刊書」）

米英ト通商關係遂次木圓滑トナリ來リタルヲ以テ日本政府ハ極東

ニ自給自足經濟關係確立シ企圖ヲ抱キ昭和十五年九月以降蘭印ノ首都

「バタヴィア」ニ於テ日蘭經濟會商ヲ開催シテ買油交渉ヲ開始シ十

月十七日ニ至リ若干ノ賣油内諾ニ成功シ爾後翌昭和十六年ニ亘リ連

續會商ヲ續行セリ然ルニ蘭印政廳ノ日本ニ對スル敵意漸次表面化シ

來リ其ノ東亞新秩序編入ニ反對ナル旨ヲ日本政府ニ申入ルルト共ニ

爲替管理法ヲ強化スル等ノ事態ニヨリ遂ニ六月十七日會商ヲ打切リ

ザルベカラザルニ至リ其ノ後日蘭印ノ友好關係頓ニ薄クナリツツア

リシ所七月二十八日ニハ米英ノ對日資産凍結令ト呼應シテ在蘭印日

本資産ヲ凍結スルト共ニ日蘭印石油協定及銀行間金融協定ヲ停止セ

リ

日本ト獨伊蘇トノ關係（出所！起案擔任者記憶）

日本ト獨伊トノ關係ハ滿洲事變ニ伴ヒ帝國ガ國際聯盟ヲ脱退セル頃以後東西兩洋ニ於テ境遇、利害ヲ同ジウスルガ爲テ遂次接近スルニ至リ昭和十一年ニハ日獨伊防共協定ヲ締結シ次テ昭和十三年夏ニハ獨側ヨリ日獨伊三國同盟締結ニ關シ提案アリ當時ハ防共協定ノ延長トシテ主トシテ蘇ヲ對象トスル軍事同盟ヲ目標トセルモノニシテ帝國政府ハ第一次近衛內閣、平沼內閣ニ亘リ連續之ガ採否ノ検討ヲ續行セシガ昭和十四年八月獨逸ガ日本ニ何等ノ豫告ナクシテ同盟ノ目標タリシ蘇ト不可侵條約ヲ結ビシコトニ依リ三國同盟ノ議ハ自然消滅セリ然レドモ日獨伊間ノ親善關係ニハ變化ナク翌十五年ニ至リ三國同盟ヲ締結セル經緯第二節ニ於テ述ブル所ノ如シ

日蘇ノ關係ハ滿洲事變以後張鼓峯事件「カンチヤズ」事件等ヲ經テ昭和十四年ニハ「ノモンハン」事件ノ發生ヲ見紛争トシテハ規模必ズシモ小ナラザル事態ナリシニ拘ラズ何レモ概ネ局地的解決ノ範圍ヲ

以テ之ガ結末ヲ告ケ兩國全般ノ外交關係ハ概シテ平穩ニ經過スルコトヲ得タルモ蘇ノ累年ニ亘ル産業計畫ノ成功、軍備ノ充實特ニ其ノ實力向上ハ目覺シキモノアリテ帝國ハ支那事變開始後終始北方ニ牽制セララルルノ止ムヲ得ザル狀態ニアリタリ

其 日本ト他ノ諸國トノ關係（出所：大東亞戰爭調査會ノ公刊書）

米英ノ經濟封鎖ニ會ヘル日本ハ昭和十六年中南米諸國トノ通商ニ血路ヲ求メント努力シタルモ「メキシコ」「ブラジル」「コロンビヤ」ヲ始メ全米洲ノ諸國ハ鐵其ノ他ノ金屬ノ輸出停止ヲ行ヒ印度政廳モ亦米國ノ禁輸實施後昭和十五年十月十九日屑鐵ノ對日禁輸ヲ聲明シ濠洲政府ハ同年十一月二十七日、香港政廳ハ昭和十六年一月十三日、比島政府ハ同年五月二十九日何レモ之ニ倂ヒ日本ハ今ヤ全ク封鎖ノ鐵環中ニ呻吟スルニ至レリ

六 米英蘭支等ノ對日武力靈勢ニ就テ（出所：起案擔任者保管ノ史實表）

昭和十五年春季以來歐洲ノ情勢高潮シテ獨側ニ有利トナリ同年九月

日獨伊三國同盟締結セラレシヨリ以後之ト機微ナル政略關係ヲ以テ
 米英側ノ帝國ニ對スル經濟封鎖處置強化セラレタルコト前諸項ニ於
 テ述ブルガ如ク之ト共ニ昭和十五年秋以來帝國ハ武力的ニモ切々ト
 包圍緊迫ヲ感ジ始メタリ此ノ緊迫感ノ實體ヲ成スモノハ米國ノ大軍
 備擴充ト極東ニ於ケル各國ノ兵力防備ノ強化ニシテ其ノ主要ナルモ
 ノ左ノ如シ

昭和十五年八月

米海軍長官「アラスカ」ニ新根據地建設公表

同年九月

米海軍省戰艦以下二百一隻ノ建艦契約發表

同右

比島藏相比島國防強化力説

同右

英海軍省太平洋屬領ノ軍事施設建設工事契約發

表

同右

新嘉坡當局「マレー」地方防衛軍ヲ組織スル旨

發表

同年十月

米陸軍省陸軍十三箇軍團戰鬪機二十九箇部隊増

加發表
「マレト」、濠洲、新西蘭、印度、緬甸、各代

表及英極東防衛司令官新嘉坡ニ會同防備計畫策
定

同 年十二月
米政府五十一飛行場建設發表

同 右
米海軍長官驅逐艦四十隻建造契約發表

昭和十六年一月
米太平洋艦隊布哇ニ集中

同 右
米亞細亞艦隊ヲ作戰部直轄トシ戰時編制ヲ執ル

同 年 二月
米英濠間ニ太平洋共同防衛ニ關スル諒解成立

同 右
米海軍長官重慶政府ガ米國飛行機二百機ノ購入
手續完了セル旨發表

英海軍省新嘉坡ニ今後無警告ニ機雷ヲ敷設スル
旨發表

同 右
太平洋共同防衛ニ關シ華府ニ於テ米、英、濠、

同 右
太平洋共同防衛ニ關シ華府ニ於テ米、英、濠、

- 蘭會談
 新嘉坡ニ於テ濠、新西蘭、蘭印代表共同防衛計
 畫協議
 同年 三月
 米國艦隊「グルックマン」號以下六隻新西蘭「
 オークランド」入港
 米國艦隊「シカゴ」號以下七隻「シドニー」入
 港
 同 右
 英支軍事協定調印
 同年 五月
 米陸軍「ハワイ」空軍増強
 同年 六月
 米陸軍省三億二千百八十八萬弗ニ上ル飛行機製
 作契約發表
 同 年 七月
 駐「マニラ」米海軍當局「スピック」灣ニ機雷
 敷設發表
 同 右
 海事委員會南阿「ダーバン」「カルカッタ」新

嘉坡「マニラ」「ホノルル」紅海方面ニ海邊連

絡員派遣發表

同右 比島ニ極東米國軍司令部ヲ創設「マツカーサ」

將軍ノ麾下ニ置ク

同右 徵集兵、護國軍及豫備兵ノ在營期間延長ノ權限

ヲ大統領ニ附與スル決議案下院陸軍委員會採擇

同年 八月 比島大統領陸軍豫備兵三萬人召集九月一日ヨリ

米極東軍司令官ノ麾下ニ編入スル旨發表

同年 九月 英東洋艦隊司令長官新嘉坡軍港ヲ要求次第米海

軍ノ使用ニ供スル旨發表

同右 米陸軍長官航空士官候補生及徵集兵ヲ三倍四十

萬ニ増員準備中ナル旨發表

同右 英極東軍總司令官、重慶派遣米軍事使節團等

「マニラ」新嘉坡、濠洲等ニ行動活潑

同 年十一月

米陸軍長官布哇戒嚴令布告權限ヲ大統領ニ賦與
スル如ク下院ニ要求

同 右

米機臺灣兩方「ガラランピ」上空飛行

同 右

「マニラ」新嘉坡ニ機雷敷設發表

同 年十二月

新嘉坡政廳英艦「プリンス、オブ、ウエルス」
號以下新嘉坡入港英極東艦隊新編成

第二節 開戦前ニ於ケル日本國策ノ動向

支那事變勃發以後ニ於ケル帝國國策ノ根幹ハ東亞ニ於ケル帝國ノ特種
權益ヲ認メラルル範圍内ニ於ケル事變ノ速カナル解決ニ在リ 然ルニ
此ノ支那ニ對スル我が政治理念ハ米英ノ政策ト根本的ニ背馳スルモノ
アルガ爲ニ事變ノ延引ニ伴ヒ逐次其ノ反對的政策ニ遭遇シ特ニ米英兩
國ヲ中心トスル列國ノ經濟的報復ノ強度ヲ高ムルニ至リシ狀況第一節
所載ノ如シ 昭和十五年頃事變既ニ四年ヲ閱シ帝國國力並ニ戦力ハ甚ダシ

支那ニ吸收セラレ概ネ當時ニ於ケル武力戰ノ限度ニ到達セルモノト觀
察セラレタルヲ以テ此ニ我が國策ハ政治的攻勢ニ依ル事變解決ニ一歩
ヲ進ムルノ要ヲ認メラレ遠クハ對歐洲政策近クハ東亞ニ於ケル諸政策
ノ活潑化ヲ策セル所遇々此等ノ措置ハ結果ニ於テ逐次米英トノ離隔反
目ヲ招徠シ急激ニ深味ニ入ルニ至レルモノナリ
右ニ關スル箇々ノ事實ノ推移左ノ如シ但シ國策ニ基ク日米交渉ニ關
シテハ節ヲ更メテ述ブベシ

一 對歐政策 (日獨伊三國同盟及日蘇中立條約ノ締結) (出所一外交決

定文書ト記憶)

獨伊トノ政治的結束強化ノ經緯ニ就キテハ第一節ニ述ブルガ如ク昭
和十五年七月近衛第二^九次内閣成立^九スルヤ當時情勢歐洲ニ於テハ獨伊
ガ對佛決定的勝利ヲ獲得シ^九リテ獨伊ニ依ル歐洲新秩序ヲ建設スル
ノ要アリタルト東亞ニ於テハ帝國ガ支那事變ノ迅速ナル處理ヲ^九シタルト
米英ノ經濟封鎖ニ對抗シ得ル新勢力隱ヲ確立スル必^九スルヲ

ニ依リ同盟締結ニ關スル三國ノ意見急速ニ一致セリ此ニ於テ帝國政
府ハ之ヲ根本的策ヲ決定シ其ノ結果トシテ同年九月二十七日日獨伊
三國同盟ノ締結ヲ見又松岡外相歐洲派遣ノ際即チ翌十六年四月十三
日五ヶ年ノ期間效力ヲ以テ日蘇中立條約ヲ締結セリ

抑々日獨伊三國同盟ハ三國ノ經濟的、軍事の協力ニ依ル世界新秩序ノ建設ヲ以
テ名分トスルモ其ノ政略的意義トシテハ東亞ニ於テハ文那事變ニ歐
洲ニ於テハ獨伊ノ新秩序建設的行動ニ對スル米國ノ干涉ヲ夫々牽制
セリ以テ事變ノ早期處理ヲ策スルニ在リ茲ニ特ニ注目ヲ要スルハ昭和
十三年始メテ獨伊ヨリ三國同盟締結ノ提案アリテ爾際ノ目標ハ蘇ヲ
對象トスルモノナリシガ今次ノ同盟ニ於テハ著シク其ノ意義ヲ異ニ
シ三締約國ノ各ト蘇聯邦トノ間ニ現存スル政治的狀態ニ何等ノ影響
ヲモ及ボサザルモノナルコトヲ確認セルコト是ナリ又日蘇中立條約
ノ收ムベキ政略的意義ハ日蘇間ノ關係ヲ調整シ帝國方對北方安全感
ヲ獲得シテ戰略態勢ニ堅實性ヲ附與シ以テ是亦事變ノ急速處理ヲ企

有米國對日之關係
日蘇中立條約ノ意義
日蘇間ノ關係
日蘇中立條約ノ意義

圖スルモノナリシガ蘇國ノ援蔣行爲ヲ禁絶スベキ約託ハ之ヲ得ルコト能ハザリキ

二 援蔣禁絶ニ關スル施策（出所ト起案擔任者記憶）

支那ニ於ケル日本ノ武力戰進捗後ニ於ケル重慶政權ノ物的命脈ハ租界、南支沿岸即チ佛印、香港方面及緬甸「ルード」ニ依ル援蔣物資ニ依存シ是帝國ノ武力戰遂行上大イニ重視スル所ナリキ此ニ於テ此等援蔣物資禁絶ノ目的ヲ以テ昭和十五年九月佛國政府トノ諒解ノ下ニ北部佛印ニ兵力ヲ進駐セシムルト共ニ同地ニ援蔣行爲禁絶ニ關スル監視ノ機關ヲ常駐セシメ又緬甸「ルード」ノ一時的閉鎖及之ガ監視ノ爲ノ軍事機關ヲ緬甸ニ派遣スル件ニ關シ英國政府ノ應託ヲ得タリ

三 日華基本條約ノ締結（出所ト外交決定文書）

癸ニ昭和十三年十二月汪精衛重慶ヲ脫出シテ帝國トノ協力關係成立セシガ日本政府ハ汪ヲ中心トスル國民政府ヲ以テ支那ニ於ケル中央

政府トシテ承認シ昭和十五年十一月三十日

(イ) 滿洲國ノ承認

(ロ) 抗日政策ノ拋棄善隣友好共同防衛

(ハ) 北支蒙疆駐屯、海南島及南支沿岸特定地點艦船駐留

(ニ) 前項地域ニ於ケル國防上必要資源ノ開發利用

(ホ) 三角地帯ノ保障駐兵

(ヘ) 日支ノ緊密ナル經濟提携

等ヲ骨子トスル日華基本條約ヲ締結セリ而シテ本條約ヲ以テ日支間

ヲ調整スベキ帝國國策ノ限度トナシ之ニ依リテ汪、蔣兩政權間ノ和平

ヲ策シテ施策スル所アリシガ遂ニ之ガ實現ヲ見ルニ至ラズ爲ニ帝國

ハ政戰兩略ニ亘ル對支大持久戰態勢ニ轉移シテ大東亞戰爭ニ至レリ

獨、蘇開戰ノ影響(出所「國策決定文書」)

獨、蘇開戰ハ歐洲戰爭ヲ第二次世界戰爭ニ發展スル重大轉機ナリ而

モ獨逸ノ對蘇開戰企圖ニ關シテハ之ガ近迫ヲ豫感スベキ暗示ハ存在

シタルモ事前ニ明確ナル連絡ナカリシヲ以テ昭和十六年六月二十二

日ノ開戦ハ寧ロ帝國上下ヲ奇襲シタル貌ナリキ政府大本營ハ直チニ

之ガ對策ヲ検討ノ結果七月二日成案ヲ得タルガ其ノ内容左ノ如シ

(1) 世界情勢變轉ノ如何ニ拘ラズ大東亞共榮圈ヲ建設シ依然支那事變

處理ニ邁進スベキコト

(2) 外交交渉ノ進行ニ依ル對南方發展ヲ策スルト共ニ周到ナル對蘇外

交交渉ニ依リ帝國ノ立場ヲ有利ナラシムルコト

(9) 對米英又ハ對蘇ノ積極的開發ハ之ヲ企圖セザルモ受動的開發ノ機

會一般ニ濃厚トナリタルモ

右戰備ノ促進ニ關スル措置ハ後由治ニ對米英開戦ノ戰備トナリタル

モノナル所當時ハ對米英自主的開發ニ關スル明確ナル企圖ヲ有セザ

リシナリ

對佛印、泰施策（出所一起案擔任者記憶）

帝國ハ昭和十五年未頃ヨリ佛印、泰ニ重大ナル關心ヲ有スルニ至レ

リ其ノ理由トスル所ノ第一ハ帝國ガ國力ノ大部ヲ注入シテ解決ヲ焦慮シアル支那事變ハ第三國ノ援助行爲ヲ禁絶セザルニ於テハ早期終末ノ公算少ク之アルガ爲ニ努力シ來リシ前述ノ援蔣「ルート」遮斷ニ關スル諸施策モ佛印、泰、兩地域ヲ確實ニ我が勢力下ニ置クニアラザレバ多分ノ不確實性ヲ認ムルコトニシテ理由ノ第二ハ米國ヲ中核トスル對日經濟封鎖著々効ヲ奏シツツアル爲帝國自活ノ爲ノ必需物資中南方資源ニ依ルモノノ將來ニ關シ不安ヲ感シ始メ今ニシテ佛印、泰ニ確固タル勢力ヲ扶植シ置クニアラザレバ次期ニ於テハ全ク策ナキニ至ルベキコト是ナリ然レドモ帝國トシテ對米英開戦ハ固ヨリ欲セザル所ニシテ開戦ニ至ラザル範圍ニ於テ自存ノ方途ヲ講セシムルコトヲ企圖セリ 即チ當時我が南方發展ニ基因スル對米英戦争ハ未だ確固トシテ認識スルノ域ニ達シテアザザリキ

此ノ時ニ當リ暹、昭和十五年十一月佛印ト泰國トノ間ニ國境紛争勃發セルヲ以テ帝國ハ之ガ紛争調停ノ役ヲ買ヒ幸ヒ三月十日調停ノ成立

ヲ見タルニ依リ政治上經濟上ニ於ケル兩地域ニ對スル我が指導的勢
力ノ伸張ハ一步ヲ進メ得タルモ未ダ以テ我ノ企圖スル所ニ達セザリ
キ

此ノ前後米英蘭各國ノ南方諸地域ニ於ケル防衛強化ハ顯著ナルモノ
アルト共ニ佛印、泰ニ對スル其ノ政治的、經濟的動向ハ動モスレバ
我ヲ顛落セシムルヤノ情勢ヲ呈スルニ至レリ帝國トシテハ自衛經濟
ノ見地ヨリ此ノ地域ニ於ケル米、「ゴム」、錫等ヲ必要トシ最モ不
利ナル情勢ニ於テモ佛印ガ米英蘭ノ對日封鎖圈ニ包含セラルルコト
ハ和戰兩様ノ見地ニ於テ忍ブ能ハザル所ナリ

時恰モ對蘭印經濟交渉ハ豫期ノ成果ヲ收ムルニ至ラズシテ遂ニ我が
代表ノ引揚ヲ見ルニ至リ現狀ヲ以テスル交渉ノ進展ハ到底庶幾得
ザルコト愈々明トナリ隨テ帝國政府ハ此ニ速ニ日佛印結合關係ヲ設
定スベク兩部佛印進駐ヲ斷行スルニ決定セル折柄獨蘇俄國ノ新事態
ヲ見ルニ至レルガ豫定ノ變更ヲ爲スコトナク兩部佛印進駐ノ實行ヲ

急ギ昭和十六年七月二十八日武力ヲ用テノク豫定計畫ニ基ク
進駐ヲ了シ之ニ伴ヒ日滿印共同防衛協定成立セリ

第三節 日米交渉ノ経緯（出所「外交資料」）

前各節ニ述ブルガ如ク日米關係ハ各般ニ亘リ逐次緊迫シ來リ就中此ノ
緊迫ニ伴フ兩國國民的感情ノ生ム輿論ノ激昂ハ輕視ヲ許サザルニ至レ
リ第二次近衛内閣ハ此ノ如キ狀況下ニ在ル兩國々交調整打開ノ企圖ヲ
有シ之ガ爲昭和十六年初頭野村海軍大將駐米大使ニ任命セラレタリ
同年四月野村大使ト「ハル」國務長官トノ間ニ非公式會談ヲ進メテヨ
リ十二月開戦ニ至ルマテ斷續變轉ノ交渉ヲ續行シタルガ特ニ注意ヲ要
スルハ日本政府ガ終始平和ヲ維持スルニ於ケル交渉成立ニ一貫シテ希望ヲ持テ火
蓋ヲ切ル最後ノ瞬間ニ至ル迄和戰兩様ノ處置ヲ採リ來リタルコト是
ナリ

之ヨリ變ニ昭和十五年末頃ヨリ日米若干ノ私人間ニ極秘裡ニ日米關係

打開ニ隨シ意見ノ交換行ハレアリシガ十六年四月ニ於ケル野村「ハル」
 會談ニ於テ先ヅ右私人間談合ノ結果作議セラレタル案ヲ基礎トスル
 日米諒解案ナルモノヲ繼テ大使ヨリ請訓シ來レリ
 請訓内容ハ日米兩國ノ抱懷スル國際觀念及國家觀念、日米兩國政府ノ
 對歐洲戰態度、支那事變ニ對スル兩國政府ノ關係、太平洋ニ於ケル海
 軍兵力、航空兵力及海運關係、日米兩國間ノ通商及金融提携、南西太
 平洋方面ニ於ケル兩國ノ經濟活動、太平洋ノ政治的安定ニ關スル兩國
 政府ノ方針等廣汎ナル事項ニ亘リ之ヲ極秘裡電撃的ニ成立セシメント
 ノ政治的企圖ニ出デタルモノナリ
 本案ノ内容ヲ要約スルニ米國ガ太平洋ニ於テ日米兩國間ノ政治的安定
 ヲ圖ラントスルコト及究極ニ於テ日本ヲ三國同盟ヨリ離脱セシメント
 スルコトヲ企圖スルモノト推察セラレタル所政府及大本營ハ三國同盟
 條約ノ精神ニ違反セス且支那事變ヲ完遂シ大東亞共榮圈建設ノ自主治
 理ヲ失セザル範圍於テ對米交渉ヲ極力推進シ右日米諒解案ニ原則的

交渉の概略

ニ同意スルノ態度ヲ決シテ四月二十二日訪歐旅行ヨリ歸朝セ
ル松岡外相ガ若干所見ヲ異ニセルガ如キ經緯ニ依リ五月十二日ニ至リ
漸ク日米諒解現地案ニ對スル一部ノ修正ヲ伴フ因訓ヲ發スルニ至リ此
ノ經過ニ於テ電撃的交渉ハ既ニ不成立ニ終レリ

爾後對米交渉ハ政府、大本營緊密ナル連絡ノ下ニ銳意之ガ促進ニ勉メ
タルモ支那關於ケル日本ノ駐兵問題、支那ニ於ケル門戶開放、機會均
等問題、三國同盟條約ニ關聯スル自衛權ノ解釋問題ニ關シ意見ノ一致
ヲ見ルニ至ラザリキ

支那事變ニ依ル在支米使權益ヲ中心トスル帝國ト米英トノ紛糾ハ年ト
共ニ増大シ彼我政略施策ノ第一線ハ佛印、泰ニ於テ鑄ヲ削リ如之日蘭
印交渉ハ成功セズ斯クテ所屬米英ヲ中心トスル對日包圍陣壇傳セラレ
ル情勢トナリ支那事變ノ處理ハ早期解決ノ目途ヲ失ヒテ昭和十五年未
ヨリ長期大持久戰方策ヲ探ラザルベカラザルニ立至リ他面國策遂行ノ
爲ニ必要ナル資源等ノ海外ヨリノ入手ハ逐次困難ヲ加フルコト確實ト

ナレリ新如キ情勢ニ於テ六月二十二日ニハ瀾、蘇開戦ノ新事態ヲ迎
ヘ米國ノ態度更ニ硬化セリ當時新カハ方塞リノ状態打開ノ爲ノ際一
ノ平和の方途ハ日米交渉ナルベキ松岡外相ヲ以テシテハ米首相ト
交渉續行ニ困難ヲ感ズルニ至レルヲ以テ七月十八日松岡外相ノ退場、
豊田外相ノ登場ヲ政治的意義トスル政變ヲ招徠シ此ニ第三次近衛内閣
出現セリ

新内閣ハ新ナル熱意ヲ以テ日米交渉妥結促進ニ努力セルモ帝國ノ南部
佛印進駐ニ伴フ米國ノ對日資産凍結ニ依リ彼我ノ交渉ハ重大ナル難關
ニ達セリ此ニ於テ八月二十六日近衛首相ハ米大統領宛所謂近衛「メツ
セーじ」ヲ發シ大局的見地ニ基ク日米兩巨頭會談ヲ提議セルモ米側ノ
容ルル所トナラズシテ交渉ハ進捗ヲ示サザリキ

政府ハ其ノ後二、三ノ經緯ヲ經テ交渉妥結ニ努メタルガ抑々妥結ノ可
能性ニ就キテハ成否ニ様ノ見達シアル所他面對日全面的經濟斷行ノ結
果ハ滿支及佛印泰以外ノ地域トノ貿易ヲ全ク杜絶セシメ我方自給自足

態勢完整ノ方途ヲ失フニ至リ其ノ影響ハ特ニ液体燃料ニ於テ甚ク之ヲ基礎トスル重要産業ハ一年ヲ出テズシテ痲痺状態ニ陥リ帝國海軍ハ約二箇年ヲ出テズシテ全ク機能ヲ喪失スルニ至ルベク即チ米英ノ經濟斷行ハ武力行爲ヲ伴ハザル宣戰布告ノ如キモノニシテ日米戰力ノ懸隔ハ加速度的ニ増大スルコト際トナレリ九月六日政府大本營ハ國策ヲ審議シ現下ノ狀況ハ實ニ帝國存亡ノ岐路ニ立テルモノニシテ日米交渉ハ某期限附交渉ト爲スニアラザレバ徒ラニ遷延シテ更ニ甚クシキ危險ニ陥ルモノト結論シ交渉ノ期限ヲ十月上旬頃ト設想セリ然ルニ十月初接受セル米國側ノ口上書ニ依レバ所謂四原則即チ

- (1) 一切ノ國家ノ領土保全及主權ノ尊重
- (2) 他國ノ國內問題ニ對スル不干涉原則ノ支持
- (3) 通商上機會均等ヲ含ム均等原則ノ支持
- (4) 平和的手段ニ依リ現狀ガ變更セララル場合ヲ除キ太平洋ニ於ケル現狀ノ不變更

ノ無條件受諾ヲ要求シ之ニ伴ヒ佛印ヨリノ即時撤兵、支那ヨリノ全面
 撤兵、日支經濟特殊緊密關係ノ拋棄ヲ求メ來レリ。之ニ對シ政府大本
 營内ニ於テハ之ヲ受諾セバ帝國ノ正當ナル既得權益ヲ全面的ニ拋棄ス
 ルニ至ルモノトスル兩統帥部長、陸相ト我方態度ヲ緩和セシトスル首
 相、外相ノ意見對立シ遂ニ十月十六日第三次近衛内閣ハ總辭職ヲ決行セ
 リ

十月十八日東條内閣成立後政府ハ白紙狀態ニ還元シ更メテ内外ノ情勢
 ヲ考慮シテ國策ヲ再檢討スルニ決シ十月二十三日ヨリ十一月二日ニ亙
 ル間政府大本營ハ政戰兩略、物動等各般ニ亙リ研究ノ結果之ヲ備スル
 判決ヲ他總決論トシテ帝國ハ最悪ノ場合開戦スルノ決意ヲ以テ十二月
 初頭ヲ目途トシ戰爭準備ヲ完遂スルト共ニ^{他國}外交交渉ヲ繼續スルコトトシ
 交渉ノ具體的事項トシテ對米甲案及乙案ヲ決定セリ
 右甲案トハ先ヅ從來ノ經緯ニ徴シ交渉成立可能ト目サルベキ程度ノ讓
 歩ヲ我方提案ニ加ハタル交渉案ニシテ乙案トハ米側ガ甲案ヲ受諾セ

ザル場合ハ事態ヲ一應資産凍結前ノ状態ニ恢復シ以テ其ノ好轉ヲ計ル
交渉案ニシテ此ノ兩案ヲ提ゲテ平和裡ニ解決スル爲ニ努力スルコトト
ナレリ

第四節 開戦決定ノ經緯（外交資料及記憶）

日本政府ハ前節ニ述ブルガ如ク平和裡ニ於ケル妥結ヲ策シテ對米交渉
ヲ繼續シ來リタル一方第二章ニ述ブルガ如ク最悪ノ事態ニ處スベキ作
戦準備ヲモ促進シ來リタルガ更ニ交渉促進ノ目的ヲ以テ十一月五日來
栖大使ヲ野村大使援助ノ爲米國ニ派遣シ此ノ間野村大使ヲシテ十一月
七日先ツ對米甲案ヲ米側ニ提示セシメ之ニ依リ妥結方ニ努力セシムル
所アリタリ然レドモ米國ハ支那問題ニ就テハ態度依然變化ナク三國同盟
問題ニ就テハ之ガ死文化ヲ要求シテ譲ラズ此ニ於テ我方ハ十一月二
十日對米乙案ヲ提示セシメ之ニ依リ更ニ努力ヲ重ネタリ 然ルニ米國
ハ十一月二十六日ニ至リ對案ヲ回答シ來リタルガ本回答ノ要旨左ノ如
二七

シ
① 帝國陸海空軍警察ノ支那及佛印ヨリノ全面的撤退

② 滿洲國政府ノ否認

③ 國民政府ノ否認

④ 三國同盟ノ死文化

右ハ日本ガ十數年ニ亘リ國力ヲ傾ケテ達成シタル所ヲ悉ク拋棄スルモ
ノニシテ新カル條件ヲ以テ妥協シテ結果ニ於テ滿洲事變支那事變ニ
於テ全面的敗北ヲ喫シタル以上ノ打撃ヲ蒙ルモノト謂ハザルベカラズ
何トナレバ帝國ガ永年種々ノ經緯ノ下ニ固メ來リシ大陸ニ於ケル經濟
發展ノ支柱ヲ喪失スル結果トナリ繼テ朝鮮ノ現狀維持モ亦至難トナル
ベク斯クテハ日滿支ヲ基幹トスル「ブロック」經濟圈ノ確保ハ不可能
ニ陥リ政治的、經濟的ノ獨立自主性ヲ失ヒ東亞ノ安定勢力タラントス
ル日本ノ理想實現ノ方途絶エ結局衰亡ノ一途ヲ辿ルニ至ルベキヲ以テ
ナリ乃チ事茲ニ至リテハ帝國ノ全面的屈服カ戰爭カノ二案中後者ヲ擇

ブ以外ニ途ナシトシテ十二月一日廟議左ノ如ク一決セリ
對米交渉遂ニ成立スルニ至ラズ帝國ハ米英蘭ニ對シ開戦ス

第二章 作戰準備

第一節 作戰準備進捗ノ經過

其ノ一 獨蘇開戦ニ關聯スル作戰準備

(出所「蘇聯開戦ニ關スル」案擔任者記意)

昭和十六年六月二十二日獨蘇開戦勃發ト共ニ帝國政府ハ我ノ好ムト好
マザルトニ拘ラズ我方國方戰策ニ誘引セラレル公算急激ニ増大シタル
モノト判斷シテ情勢ノ推移ニ應ズル所要ノ作戰準備ヲ爲スニ決セルコ
ト第一章第二節ニ述ブル所ノ如シ此ニ於テ統帥部トシテハ凡ユル推移
ヲ想定シ之ニ應ズル作戰計畫ニ深刻ナル檢討ヲ加ヘタリ即チ
(1)滿洲方面ニ於テ對蘇戰爭生起スル場合